

— 講演より —

呼吸感がひとつもないんじゃない呼吸感はやはりあるんです。あ
るけれども、むかしの人が考えていたような呼吸感と、今の人が考
えたものと違うんです。そうすると逆にみなさんはお聞きになりた
いでしょう？むかしの人の呼吸感と今の人の呼吸感とどこが違うの
かといいたいでしょう？むかしの人の呼吸感というのは生理的な呼
吸感です。ところが今の人の呼吸感というのは精神、心です。われ
われの心をどう持つて行くかというものが生理と合わさって出てく
るといふことで、古人のいうのは、二つ息すれば震えてくるなどと
いふのと同じです。それは、人間の生理です。生きた身体の自然現
象です。当然出てくる現象です。今の人はそれを心として作れるん
です。だから呼吸という言葉は、いいようがないので仮りに呼吸と
いうけれども、息をしているということもあるんですよ。それも加
わるのですが、ハアハアいうのも息、静かに丹田に吐いてしまう息
の吸い方も呼吸です。どういうふう呼吸するかということは、そ
のコントロールは人間が知っているのですから、心でできるのじゃ
ないですか。私は坐禅の習慣の中で、丹田の力を抜いてしまつて静
かに息をしようという時には、回数は普通の人の何分の一かになつ
てしまふ。ああいう習慣で今でも字を書くとものごく静かな字が
できるんです。誰かに随分静かな字ですなとか、淋しいですなとい
われる時はおそらくそうで、ものすごく静かです。しかもそれは自分
の心でコントロールできるんです。生理のほうも、心でコントロール
できなくはないが、自然現象的なものだから、そうじゃないでしょう。
今ここで呼吸感というのはそれが芸として現れたいものだけ選ん
でいうのですよ。下らないものを流行だからというのじゃない。こ
れが今最も新鮮なものを作る根底のひとつじゃないかと思うのです。
大変深く掘り下げてみましたが、実はこの話だけで相当な時間を
費やして、実例を挙げてお話しするほうがいいのですが、現象的な
話をもうひとつ申し上げたいのです。

これは「現代性」というものを目で捉えるほうです。それは何か

といえ、今、書といつてもむかしの書とは非常に違つてゐる。何
が違つてゐるか、むかしとはそれを鑑賞する時の形が違つてきた。
むかし、書を鑑賞するというと、平安、鎌倉初期くらいまでは大抵
「帖」です。今の折本みたいな帖とか、粘葉本とか巻物、綴じた本
とか折本で、そうでないものだったら掲げてみる扁額とかで、軸物
などは鎌倉後ですから、それ以前は、平安朝時代には床の間もない
し、軸物もない。壁書といつて、壁に貼る形で書いたものはありま
すが、とにかく鑑賞するものは卓上に置くとか、床の上に置いてみ
る。ところが鎌倉時代になつてくると上置は置かなくなるんです。
むかしの生活は、貴族も板の間で暮らすわけで、ちよつと座る所だ
け畳を置く。今でも大きい寺や古い寺などは全部板の間じゃないで
すか。門主の座る所だけ畳を置いていたのが後には全部が畳になつ
た。畳になりますと、どこにでも自在に座れるわけです。それまで
は、人間の位置が上げ畳を置く位置で決まっていたわけです。客は
ここ、主人はここと決まっていた。その他の人は板の間で操作をす
る。ところが、どこにでも座れるようになると、どこからでも物を
見られるようにしたくなつたわけです。これは禅宗が大きく影響し
て変わるのですが、とにかく大きな字を書いたものが、中国からど
んどん入つてくる故もあるのですが、壁面などに掛けて見るといふ
事になつてきて、従来床の間には、つまり上段の間の背景に絵が書
いてあつたり、綴子が貼つてあつて、山水など書いてあつたり、聖
賢の図などがあつた。それが軸物に変わつて、四季おりおりに自由
に取り替えたり、来たお客の具合によつて掛け替えられる。床の
間の背景としてあつたものが軸物に変わつてしまふ。そうすると、
軸物としての字の書き方が出てくる。随分視距離が遠くなるわけ
です。視距離が遠くなるにしたがつて文字が迫力を帯びてくるわけ
です。これはいつの時代でもそうで大篆や小篆の時代にはあまり迫力
などはない。意識しないまでもあつたのですが、意識して迫力らし
いものを持たせていない。ところが隷書ができてくると、屋外に石
を刻んだものを立ててその文章を不特定の人達に見せる。(つづく)

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

『祭墨』昭和五十二年十月